

大笹街道GUIDE

Ohzasa Road ガイド



財団法人 仁礼会



ACCESS

大笹街道・峰の原高原へ

JRで

東京方面から 長野新幹線 東京(あさま 80分) 上田ーバス
・菅平高原行(60分)ータクシー(10分)峰の原高原
長野新幹線 東京(あさま 90分) 長野ー電車・
長野(20分)須坂ータクシー(30分)峰の原高原
大阪・名古屋方面から
中央本線 名古屋(特急3時間) 長野ー電車・長
野(20分)須坂ータクシー(30分)峰の原高原

車で

東京方面から 関越自動車道 藤岡 JCT/ 上信越道・上田菅平 ICー菅平口ー菅平ー峰の原高原ー須坂
関越自動車道 藤岡 JCT/ 上信越道・須坂長野東 ICー須坂ーR406ー峰の原高原
中央自動車道 岡谷 JCT/長野道/更埴 JCT/ 上信越道・須坂長野東 ICー須坂
大阪・名古屋方面から
名神・中央自動車道 岡谷 JCT/長野道/更埴 JCT/ 上信越道・須坂長野東 ICー須坂ー
R406ー峰の原高原

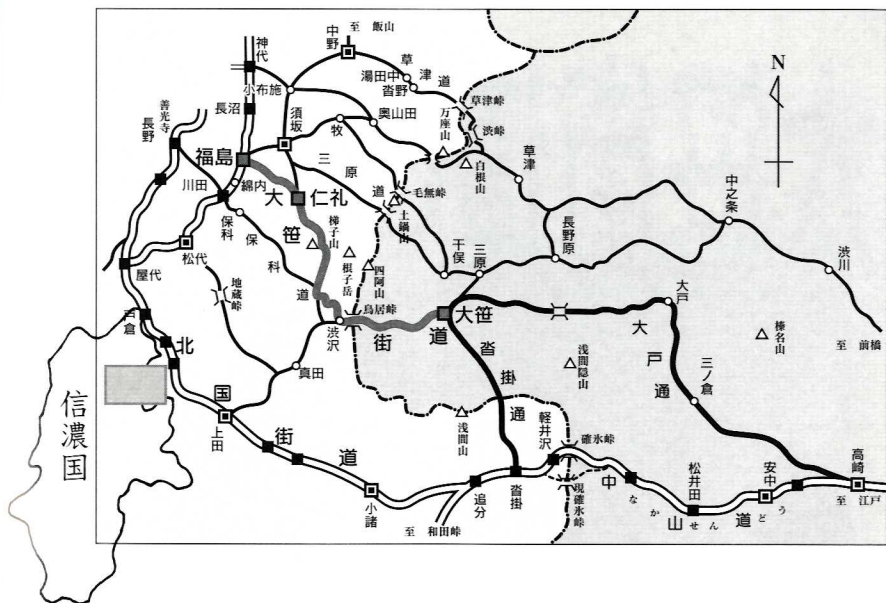


参考文献 歴史の道調査報告書(長野県教育委員会) 大笹街道(真田町教育委員会) 江戸物産事典(展望社)
江戸時代の信濃紀行集(信濃毎日新聞社) 続藤栗毛十編 仁礼誌(仁礼会) 大笹街道と石仏(仁礼会) よみがえる大笹街道(仁礼会) 制作: いわもとさる 98

¥ 200



大笹街道が南北に横切った峰の原高原・菅平高原（左側：根子岳 中央奥：浅間山）



大笹街道とは・・・

大笹街道は、江戸時代、善光寺平と上州を経て江戸を結ぶバイパスとして物資輸送の重要な脇街道でした。江戸末期には、善光寺詣でや草津温泉への湯治、大谷不動尊・米子不動尊詣での旅人の往来する街道でもありました。

「大笹街道」の名称は、上州大笹（群馬県吾妻郡嬬恋村大笹）に至るところから呼ばれたもので、上州側からは「仁礼街道」あるいは「信州街道」と呼ばれていました。

大笹街道の起点は北国街道・福島宿（須坂市福島町）。鮎川に沿って井上・八町・栃倉と段丘をのぼると仁礼宿に至り、ここから先は険しい山道となるので身支度をととのえて、宇原川沿いの道をさかのぼり、大谷不動尊入口を経て峰の原・菅平高原を土手道で南北に横切って、鳥居峠（二・三六二m）を越え、田代を経由して大笹宿に着きます。これが江戸への最短道・大笹街道でした。

大笹宿から江戸へは、大戸を経て高崎に至る大戸通りと、浅間山麓の東側をまわって沓掛宿で中山道に出る沓掛通りがありました。

この街道は、菅平越えの険しい山道で、冬になると雪で行き来がとどえる事もありましたが、本街道の北国街道・中山道と比較して次のような多くの利点がありました。

- 1 上信国境の山を越すにしても、非常に距離が短い。
- 2 本街道は公用者や公用荷物が優先で、商人や商用荷物は日数を要し、駄賃のほか手数料等の経費がかさむ。
- 3 荷物継立の宿場もずっと少ない。（大戸通りで行く場合 須坂・高崎間は七宿、北国街道・中山道は十七宿）

そのため、安い輸送経費で荷もあまりいたまず早く運ぶことができるため、米・菜種油・たばこ・木綿などの商用荷物がこの街道を使って大量に運ばれ、一時は北国街道をしのぐ賑わいだったといわれています。

江戸時代の

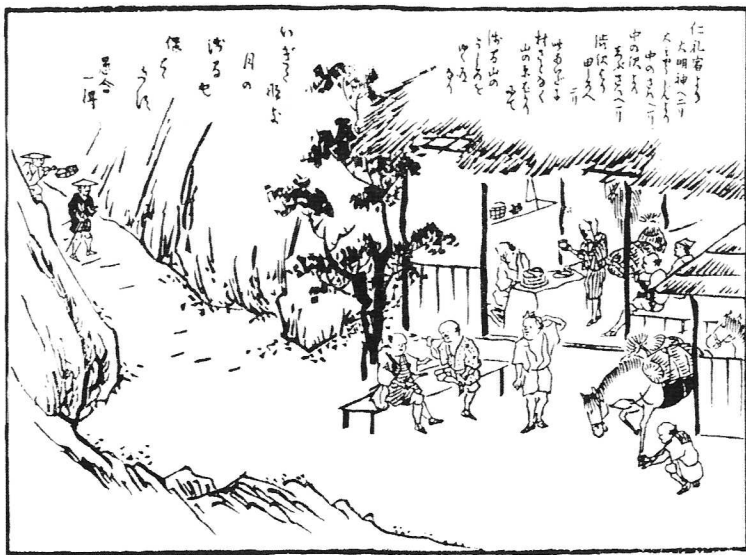
街道と宿（宿場）

道は時代と共にそのルート、重要度が変わってきました。律令制度下では北九州の警備のため山陽道と西海道の一部が、鎌倉に幕府ができると京都と鎌倉をつなぐ東海道が重要な道とされました。

慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の戦いで徳川家康が天下を取ると、それまで大阪や伏見などに屋敷を置いていた大名たちは、これを江戸に移すようになり、同八年、家康が征夷大將軍となるとその城下町である江戸は、国の中心地となりました。以来二百五十余年、全国的主要道路は江戸に向かって通じていたのです。

主要幹線は五街道

江戸幕府は、慶長六年（一六〇一）から東海道をはじめとする主要街道の設定に積極的に着手し、街道には宿駅と関所を設け街道を把握しました。



大笹街道の様子（十返舎一九・続膝栗毛より）

そのなかで五街道とよばれる主要幹線が、東海道・中山道・日光街道・奥州街道・甲州街道で、いずれも江戸を起点としていましたが、この五街道に付随する街道がいわゆる「脇街道」で、道中奉行の管轄下にありました。

宿（宿場）は地域文化の中心

街道には一定距離の町や村ごとに「宿」と呼ばれる旅行者や荷物の輸送・通信機関の役目をする休泊地が設けられていました。それまで律令制度下では「駅」といった制度がいましたが、平安時代に崩れ、これに代わって「宿」ができ、江戸時代になって本格化し繁栄しました。

「宿」の役目の第一は、公用の旅行者や荷物の輸送でした。そのために一定数の人馬を常備し次の宿まで継ぎ送ることが原則だったことから「継ぐ」を「次」と書き、「東海道五十三次」の言葉も生まれました。

第二の役目が通信機関で、第三は、休憩・宿泊の施設を持つことでした。幕府の役人や大名・公

家などを泊めるところを本陣・脇本陣といい、小さな「宿」などでは問屋と兼ねるところが多かったようです。また、一般客を泊める旅館は「旅籠」（はたご）と呼ばれました。

「宿」は交通上の重要な施設であると同時に、各地の文化がもたらされるところでもあり、地域文化の中心ともなつて繁栄しました。

近世の宿駅制度は幕府の公用旅行施設であり、また公用荷物や書状の輸送機関でもありました。そのために、五街道と付随する街道は幕府の道中奉行の支配であり、街道筋の施設は整備されましたが、それ以外の脇街道、脇道は脇往環といわれ、勘定奉行の支配下にあり「宿」の規模も小さく、機能も不備であったようです。

脇往環は幕府直轄の街道とちがい、藩主の領内諸街道の整備によるところが多く、大笹街道もその例にもれず、真田氏の開発した上田・大笹・長野原・沼田の幹線道を利用しながら発展していったと思われます。

江戸時代の

大笹街道

大笹街道が、いつごろ開かれたかは明らかではありませんが、中世の鎌倉時代には善光寺と関東を結ぶ近道の一つであったようです。また、永禄九年（二五六六）秋に武田信玄が仁礼の関所の関守に、上野の人・鎌原重澄等の荷駄通行を許していることから、軍事上・交通上重要な道であった事がうかがえます。

慶安の争い

大笹街道が公道として認められ世に出るようになったのは、慶安三年（二六五〇）に起こった紛争以降でした。

その争いは、北国街道の宿々が連合で幕府に訴えたもので、内容は「信州川中島御領所御給所から出す駄賃荷物はすべて本街道を輸送していたところが、松代領の仁礼村から上州沼田領の大笹村へ山中の脇道を通し、そこから小諸領査掛に出



福島宿の道標（須坂市福島町）
大笹街道の起点にある
右 松代道 左 草津仁礼道の道標

すようになり、駄賃荷物が本街道を通らなくなった。これでは宿方が疲弊して御用伝馬や北国筋の大名の上り下りの人馬が勤まりかねる。仁礼村と大笹村は両方で家が百戸ほどなのに対して、訴訟側の十二カ所（矢城本町・同中町・下戸倉町・上戸倉町・坂木町・上田原町・海野町・本海野町・田中町・小諸市町・同古町・追分町）の伝馬継家数は三千ほど。駄賃荷物が脇道を通って本道を通らなければ、右の伝馬継の者どもが渡世を送ることもできない。ことに田畑がないので「非常に困る」つまり、「宿場の稼ぎを横取りされては困る」というものでした。

これに対して仁礼村・大笹村は、次のような返

答書を出して対決しました。

「仁礼街道を近年になって川中島の御蔵所御給所から出す荷物が通るようになったというのは偽りである。仁礼街道は昔から、松代より東の方の手寄りの村々はいうまでもなく、越後・越中・加賀



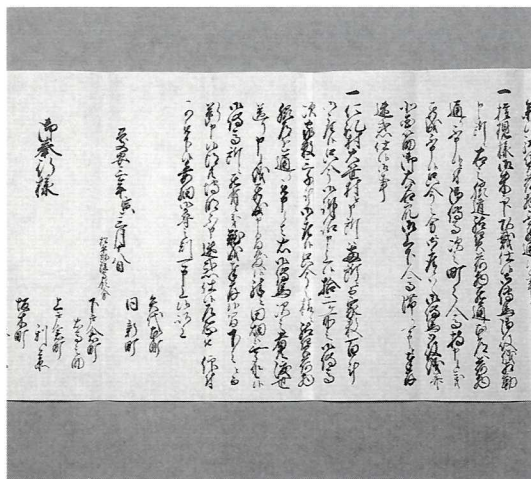
仁礼宿の口留番所跡（須坂市仁礼町）

・能登からも通ってきており、松代城主から仁礼村に昔から荷物改めの番所を置いている。昔から通行していることは松代より東の村々の百姓も知っており、代官・地頭方も承知のことで、浅草御城米を仁礼村から大笹村に馬継をして査掛に出したことも証拠がある。川中島御領所御給所の荷物を仁礼街道に出すというが、松代より東の松平遠江守（飯山藩）・佐久間権之助（長沼藩）・堀大学（須坂藩）・真田伊豆守（松代藩）の領分、御蔵所の越後から出雲まで勝手次第に長沼・福島から馬継をして仁礼・大笹を通って査掛村へ出ている。そのわけは、千曲川東岸の六川、福島から仁礼街道を経て査掛までは十四里ほど、六川・福島から屋代を経て査掛へれば二十三里あって、道程に多分の相違から仁礼街道を望むのである。訴訟方で田畑が無いというが、追分村は畑ばかりで、その他の村々でも田畑がたくさんあるではないか」

同年八月に幕府より下された裁決は、「松代より西の者は北国街道を、松代より東の者は仁礼街道を通るように。さらに松代より東の者でも北国街道を通りたい者は心まかせに往来するように」

と、北国街道の脇往環として大笹街道を認めたものとなりました。幕府が公認した背景には幕藩体制のなかで諸藩の年貢米の江戸への廻米や北上州払い(売り払米)の輸送があつたと考えられます。

その後、松代より西の村々もこの街道を利用するようになり、人や荷物が多く通れば、争いはまた繰り返されるのでした。



慶安3年 幕府への訴状の写し(羽生田常雄 所蔵)

他道との争い

善光寺平から上州への道は、大笹街道のほかに中野から沓野―渋峠―草津へ至る草津道、小布施―山田―山田峠―上州千俣の山田道、または高井―牧―万座峠―千俣の万座道、須坂―灰野―毛無山―千俣の三原道、そして保科道(川田から保科を経て菅平で大笹街道と合流)などがありました。しかし保科道以外は、いわゆる「抜け道」で、それら他道との争いも幾つか生じています。

保科道との争い 「綿内村から保科道を通って上州へ出るのは古くからのことなのに、仁礼村がこれを差し留めた」として元禄十年(一六九七)、訴訟が起きたものです。奉行所は「綿内村の百姓の訴えるところの方に理がある。今後いままで通り保科道を往来してよく、仁礼村はこれを妨げてはならない」との裁決を下し、仁礼村の百姓が非分のことを申したというので、名主が牢に入れられるという結末になりました。

文化年間から抜け道に何度も抵抗してきた大笹宿が、仁礼宿と一緒に反対したのが文政九年(一

八二六)の草津道との争いでした。

草津道との争い その時の様子が「仁礼枋倉青年会の沿革」に次のように書かれています。

「徳川幕府ノ頃、仁礼宿ハ北国街道御裏道ノ重要宿駅ニ当テラレ、賀州前田侯ノ江戸御登城御帰国ノ節、犀川大水渡河不通ノ節ハ此ノ裏道ヲ御通行ナサレル事ニ相成リ賀州侯ノ御指定宿其ノ他、須坂奥田子ノ御指定宿(奥田公御通路ノ節ハ迎式ス、飯山殿様ノ御指定宿(葵御紋印ヲ立テ警備ス)、以上ノ御指定宿御通路ニテ、上州吾妻郡田代大笹二通荷運搬致シ居リシ処、高井郡平隠村沓野ヨリ上州草津二通ズル道路ヲ開キ、仁礼宿ノ荷物ヲ奪イ宿ヲ潰シ北国街道裏街道ヲ沓野ニ移サント致セシニヨリ、仁礼宿ノ住民上下一致心ヲ一ニシテ、直チニ江戸ニ願イ出、ココニ沓野村ヲ相手取り公事出入ニ及ビ、歳月ヲ重ネ、又、此ノ時ニ当タリ村内老若男女、宿ノ興亡ハ此ノ一件ニ存スルトシテ一致協力事ニ当タリ、其ノ歩ヲ進ム。若者連ハ直チニ立チテ決死隊ヲ作り、遠ク沓野ニ入り込ミ夜ニ紛レテ道路ヲ破壊シ、上州二通ズル荷物ノ不通ヲ計リ、宿ノ出入リ終ルマデ誠実ヲ尽シテ我道路

ハ昼夜警備シテ尽シ居タリシガ、宿出入リモ無事勝得テ宿民喜ビ江戸出張、村方役ハ記念ノ為ニ若者連ノ功賞トシテ江戸神田明神森下ヨリ大神楽道具一式ヲ買イ求メ荷造リテ若者連ニ送り、七月二十日、大祭初メテ奉楽スル事トナル(以下略)」。今でも仁礼では毎年七月御祭礼が行われ、若者たちによる神楽が奉納されています。

中馬・手馬で運ばれたもの

「宿」には公用の為の伝馬人足と馬が常備されていました。ほかに中馬(ちゅうま)と手馬(てうま)の制度があり商用荷物の輸送にあたっていました。中馬は、いわゆる駄賃稼ぎの馬で、賃馬・中継馬からなまったものといわれ、手馬は農民が持ち馬を使って物資を近在まで運ぶものをいきました。大笹街道ではこれらの馬によって、北上州や市場へ信州米・油をはじめ、たばこ・木綿・綿類が移出され、塩・茶などが移入されました。しかし中馬・手馬の往来が盛んになると、そこにも多くの争いが生じました。

大笹街道の散策ガイド

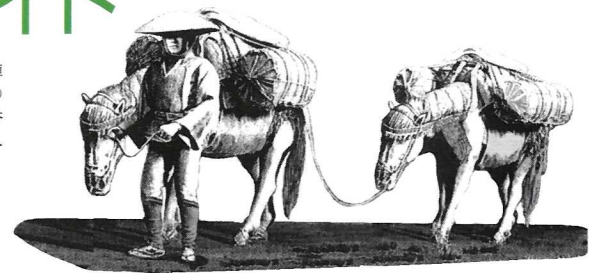


仁礼宿
(にれいじゅく)

仁礼宿は、常盤の坂道の東側に本陣・問屋を兼ねた通称、下の問屋、上の問屋が並び宿場の北、関谷には口留番所が置かれ、ここを通過する荷や旅人を監視していました。



▲仁礼宿の馬頭観世音



大笹街道を歩き石仏を尋ねる会・供養祭



石小屋洞穴より出土
微隆起線文土器

高原の土手道(須坂市峰の原高原)

標高1,500m以上の冬の高原は、雪と風が人馬の道を見失わせ、多くの遭難者を出していました。

そのため造られたのが「土手道」です。高さ1m~1.5m程の盛土で、降雪は風に飛ばされ余り積もらないので、人馬は歩きやすく道もわかりやすかったです。

大笹宿(群馬県吾妻郡嬬恋村)

大笹宿は、中山道・沓掛宿と大戸を経て高崎で中山道に合流する二つのルートの分岐点で重要な位置にあるため、寛文2年(1662)沼田藩により関所が設けられました。又、飯山・松代・須坂の各藩専用の米蔵も置かれ、年貢米の江戸への輸送や売り払い等でおおいに賑わいました。



▲大笹関所跡

福島宿(須坂市福島町)

大笹街道の起点・福島宿は、千曲川の右岸、屋代からわかれて松代・川田を経て牟礼に至る北国街道の、松代通りにある、川沿い南北に発達した宿場でした。江戸時代後期には、千曲川通船の着船所としても物資流通上の重要な地位を占めました。

八丁鎧塚古墳(須坂市上八町)

鮎川沿いの段丘上に築かれた積石塚古墳で、径2.3mと径2.5mの二つの古墳が隣接しています。金銅製帯金具・鉄製銚など貴重な品々を出土しています。

大明神沢茶屋(小県郡真田町)

菅平牧場のはずれ、別荘地の際を流れる川の東側にあったといわれ、仁礼、大笹宿の中間点として荷物を中継・交換する場所、及び休息所として重要な位置でした。

馬方の月収は・・・

馬一頭いれば駄賃稼ぎで水呑百姓も優に一家を養うことができたといわれていますが、どれほどの収入だったのでしょうか。

文化6年(1809)仁礼一大笹間は本馬669文 軽尻453文と記録にあります。宿泊料で現代の金額に比較・換算してみると、別の資料で、旅籠代 200~250文ですから、月収約50~70万円と推定されます。

大笹街道をゆく

今日では、長野から東京へ新幹線を利用して通勤も可能になりましたが、江戸時代はどれくらいの時間を要したのでしょうか。

須坂藩の記録によれば、江戸から須坂へ「馬一頭」に荷物をつけて中山道・北国街道経由で六日かかった」とあります。一方、大笹街道を利用した場合、同じ須坂藩の記録で中山道経由・五日間とあり、大笹街道利用の方が一日短縮できたことがわかります。したがって善光寺平と江戸を結ぶバイパスとして、人の往来以上に商用荷物が経費・日数とも節約できる街道として多に利用され賑わったのです。

駄賃馬は、仁礼―大笹宿間約八里(三十二キロ)の険しい山道を往来しましたが、朝早く仁礼宿を出ても、その日のうちに大笹宿まで行つて戻することは難し

福島宿からの荷駄数 (福島区有文書より)

	川田	長沼	仁礼	小布施
	北国上り	北国下り	大笹街道	谷街道
元治 1	563	130	247	17
慶応 1	499	198	212	4
2	707	111	356	38
3	689	323	189	55
明治 1	444	115	76	39



大笹宿のようす (十返舎一九・善光寺草津道之記より)

く、日帰りのためには両宿の中間にあたる中の沢・明神沢などの茶屋で荷物を交換していました。特に冬の峠越えは厳しく、高原の雪道は吹雪で分からなくなるため土手道が造られました。猛吹雪に見舞われ命を落とす旅人も少なくありませんでした。

十返舎一九・清水浜臣が

冬の厳しさを別に、春から秋にかけての街道は自然の彩りに満ちていました。善光寺参りや草津温泉への湯治客の道として多くの旅人が往来し、私達にも馴染み深い有名人も通っています。

・弥次さん喜多さんで有名になった「東海道中膝栗毛」の作者十返舎一九(一七七五―一八三一)もその一人です。一九は全国各地を取材旅行して、道中記「膝栗毛」を書き続けましたが、信州へは四回ほど訪れています。三回目の文政元年(一八一八)に江戸から三国街道で越後を経て、善光寺に詣で、この街道を通って草津へ向かいました。

「善光寺より、上州草津にゆかんとして、大笹通

といへるを行。珠に難波の山道なり。仁礼駅より田代といへるまで、行程七里のあひだ山里なし。」と難路であつたとしています。一九は仁礼宿の間屋で酒造屋でもあつた羽生田家に宿泊し、『いづくでも人鬼のなきばかりかハ酒にも鬼はなくて嬉しき』と歌を残しています。

同じ頃この街道を通つた清水浜臣(一七七五―一八二四)は、江戸の国学者(本業は医者)として知られ、仁礼宿・問屋の羽生田修平の師でした。弟子の羽生田邸に三泊し、草津に向かっていました。その旅行を綴つた日記が「上信日記」で、当時の大笹街道の様子がよく表現されています。

「今日も天気よし、今日は大笹越して草津へと思う。主にいとまを告げ出ず。修平、途中まで送り参らせんとてともない。ひた登りに登ること二里八丁、滑峠、とくさ窪などを経て峠に至る。なべて裸山なり。ここのうち開きたる所を今菅平というは、古の菅の荒野ならましと修平いやり。げにこここの荒野の样いわん方なく恐ろし。今日は風吹くというばかりの日にはあらぬに、荒野のはげしくて息つきあえぬばかりなり。」

温泉

湯つ蔵んど(ゆくらんど 須坂市仁礼町)
県下最大級の日帰り温泉施設です。11種類の風呂・露天風呂を中心に太広間・レストラン・ゲームコーナーなどの施設も充実しています。



仙仁温泉

須坂市仁礼町

仙人伝説と洞窟風呂が魅力の山あいの静かな一軒宿です。

須坂温泉

須坂市大谷町

北信五岳が一望の須坂温泉は会議室・体育館も完備です。

りんご・ぶどう

須坂は、信州りんご・巨峰ぶどうの主産地です。国道沿いの観光農園で新鮮な秋の味覚のりんご・ぶどう狩りが楽しめます。また、夏の桃も格別の味です。

花・花見

味だけでなく花も見事です。
4月中旬 桃・桜 5月上旬 りんご 6月中旬 レンゲツツジ

美術館・博物館

須坂市及び周辺には魅力的な



須坂クラシック美術館

美術館・博物館が多くあります。
須坂クラシック美術館

須坂を代表する町家「元牧家」に古民芸・着物を展示公開。

笠鉾会館ドリームホール

祇園祭の賑わいが伝わる笠鉾・祭屋台と全国の祭玩具を展示
須坂版画美術館

アートの世界、版画専門の館。
近代から現代の作品を展示

世界の民俗人形博物館

世界の文化・暮らし・ファッ

OYAFUDOUSON

大笹街道の黒門から谷あいの道を1・5キロほど登った奥にある大谷不動尊は、米子不動尊とは、根子岳の稜線をはさんで背中合わせの位置にあります。早くから地元はもちろん、篠ノ井・川中島・川田方面の人々の信仰を集め、五穀豊穡・養蚕繁昌の祈願がされてきました。
本尊は高さ五尺一寸五分(約一五五センチ)で、鎌倉末期から南北朝時代の作といわれています。里堂は仁礼・高顕寺境内にあり、平成五年改築された際にアマ・プロをとわず広く一般から募集し、寄進された百枚ほどの天井絵は、それぞれの願いが込められた見事な作品です。

大谷不動尊

五月十五日のお山登りは、これから白布に包まれたご本尊が背負われ、五色の幟をなびかせた行列をしたがえて、奥の院へと向かいます。夏護摩(八月十九日)をへて里堂へのお山降りには十月十五日ですが、現在は御分身により執り行われています。奥の院から崖づたいに、石仏や祠をたどりながら先へ進むと修験者の信仰の地としての雰囲気冷気とともに漂い、深山の静寂をやぶる瀑布が壮観で別天地をつくり出しています。
この不動尊は、地元の三力村協議委員会・大谷不動尊世話人会が、ご守護と維持管理にあたっています。

(P.13 マップ参照)

シオンを感じさせる人形を展示
田中本家博物館

豪商の屋敷に、その歴史を伝える用具とコレクションを展示
須坂市立博物館

須坂市の古代から近代までの歴史を物語る資料・品々を展示
小布施町*高山村

おぶせミュージアム(北斎館) 高井鴻山記念館(日本のあかり博物館) 現代中国美術館(盆栽博物館) 信州高山一茶ゆかりの里(高山村歴史民俗資料館など)。

大笹街道ガイド

平成十年五月二十日発行
発行人 目黒 淳茂
発行 財団法人 仁礼会
長野県須坂市仁礼町六五五
☎38210034
☎026(245)9441

